

浄

monthly
JŌDO

土

July.August 2009 合併号

7.8



法然上人讃仰会



悪を造る身なるが故に、
念佛を申すなり。
悪を造らん料に念佛を申すには非ず。
心得べきなり。

(三心料簡および御法語)



呉丘 富塚善吉・友禅模様師『浄土』2009年表紙の人

明治33年神田区松下町に生まれる。

日本画の小林呉橋に師事。

淀橋区落合に工房を構え多数の弟子を持つ。

戦時中、千葉興津に疎開、戦後も潮風の漂う仕事場で友禅を描き続ける。

昭和52年逝去。

表紙は構図から下絵、糸目糊置、色挿し、仕上げ、金加工まで全工程を一人で行った逸品。

7・8月号『蓮文』

浄土

2009/7・8月号 目次

阿弥陀さま(二)	佐藤春夫	2
小説快僧渡辺海旭『壺中に月を求めて⑥』	前田和男	8
会いたい人 佐野成宏さん①	関 容子	14
響流十方	林田康順	22
素直になりたくてもなれない心を抱きしめる	荻野ゆう子	26
朝めし礼賛	麻生タオ	32
江戸を歩く 第二十八回	森 清鑑	34
浄土誌上句会	遺者=増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	47
編集後記		48
教えと法話	生野善應	



表紙題字=中村康隆前浄土門主
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

浄土誌上ライブラリ 昭和15年〜16年連載

佐藤春夫

|| 子供にわかるお話 ||

阿弥陀さま
(二)



7・8月号(巻文)

(二) 法蔵菩薩の理想国

法蔵菩薩は今一息で仏さまになろうという時になって、自分が仏さまになったら、どんな立派な国を開こうかと、一とおりでない思案をしました。その思案のために五劫というとても長い時間がかかったのです。いったい一劫というのは一つの地球が出来てからそれが滅びてしまうまで、つまり地球の一生というわけで、法蔵菩薩が思いどおりの国というのはどんな国であろうかと思っている間に地球が五つ出来てそれが順々に滅びてしまったわけです。法蔵菩薩のお師匠さんはこんなに永い思案の間それを黙って待って、その出来上りに骨を折ってやろうと用意して居られたのですから、どんなに永生きしたお方であつたらうかと疑われるのですが、何でも四十三劫生きて居られたと申すことです。仏さまとというのは人間の智慧そのものでありますから、天地のある限りは亡びないもので天地と同じように命の永いものなのです。それですから仏さまは五十年しか寿命のない人間のように性急ではありません。そのうえ、これ以上のものがまたとないという程の立派な世界を拵えようというお望みですから精一ぱい考えるのはあたりまえのはなしです。

たくさんの仏さまが居られます。そうして、それぞれの仏さまはみなこの上なしの工夫を凝らし、ある限りの智慧をしぼって、みな思い思いの立派な国を開いています。法蔵菩薩は今まであったどの仏さまのお国よりも一番いい国がこしらえたいのです。それ故、今まであった仏さまの国を一つ一つ見学してまわられました。仏さまたちの御旅行は汽車や飛行機の旅よりもまた一段と速いので、五劫の間にはそれだけの大旅行をする時間は、も

ちろんたつぷりとあつたわけでした。

法蔵菩薩は行くさきさきの国々で大へん感心しました。さすがにみな仏さまのお開きなされた国だけあつて、どの国もみなそれぞれに美しくすぐれて居りました。そうしてそれぞれの国の人々はみな喜び深く感謝して生きているのを見ました。法蔵菩薩は見て歩かれた国々の風俗や習慣や景色などのすぐれていいと思われるものは一つのこらず覚え込んで置いて、それ等を皆ご自分の国でも採用したいとお考えになりました。つまりあらゆる国々を見学してその長所を残らず集めようという企てでした。なるほど、これならばどの仏さまの国よりも一段といい国が出来るのはあたりまえです。

法蔵菩薩はたくさんの方々を見て感心しているうちにも、どの国にもみな大きな欠点があつて、その欠点だけはどのいい仏さまの国でもみな共通のものに思われました。その共通の欠点というのはそれぞれの仏さまがそれぞれに国をせっかくおつくりになりながら、その国の住民になるためにいろいろとむずかしい条件をそなえている事は法蔵菩薩にとつて非常に遺憾に思われるのでした。むずかしい条件づきでなければ自分の国へ人を住ませないなどというのは人間並のけちな了見で、仏さまとあろうものはそんな狭い考えではなく、誰でも自分のところへ来たいという人ならむずかしい条件抜きで好き勝手に来られるようにしなければなるまいとお気がつきました。

いったい人間というものは間違いをしでかしやすいものである。誰しも間違いをしたいと思つている者はないのに、つい何かの拍子に間違つたことをしでかしてしまふ。一つの間違ひがまたつぎの間違ひを産み出すのが人間の生活というものである。これが人間の一番気の毒なところである。その人間に向つてどんな間違いをもしでかさなかつたなら自分

の国へ入れてやろうというのでは、折角のいい国へ入れる人というのはいくたりもないわけである。これでは仏さまはみな物惜しみをしていらっしゃるようなものである。と、法蔵菩薩はご自分がまだ菩薩になれなかった普通の人間のころの事を思い出してみてからお氣がつかれたのです。そうして、ご自分の心のなかでひとりごとを申しました。

「よし、自分のこしらえる国はありとあらゆる仏さまの国々でも第一等のものでなくてはならない。それにここへは誰でも来たいと思う人ならみな入らせなくてはならない。間違いをたくさんしかした人間は人間の生活のなかで一番多く苦しんでその罪を生きながらに受けている筈である。それが死んでから後までどの仏さまの国へも行けないではあまりかわいそうだから、せめては死んでからだけでもいくらか楽をさせてやりたい。生きている時の勘定は生きている間にすましている筈だから、死んだものは誰も彼もみな一様に取り扱わなくてはなるまい」

法蔵菩薩は先ずこういう大きな慈悲の心を感じましたが、

「そんなことを言えば、それでなくても間違いや悪いことをする人間がもう一そう間違いや悪い事どもをたくさんしかすであらう」

「いや人間というものはそうむやみと悪いことが出来るものではない。又悪い事をする間違えた気の毒な人は、どんなにきびしい掟や約束でも忘れてしまうものなのだから、一番気の毒な出来そこないの人間なのだ。」

法蔵菩薩はこういうふういろいろな自問自答して、はじめは人殺しのようなあまりひどい罪を犯した人だけは困るのではないかとも思わないではありませんでしたけれど、やはりそんな区別はつけないで誰でも差支えないという事にきめて氣分がさっぱりしました。

こうして、どこの仏の国にも入る資格のない人たちを自分の開く国——この国こそあらゆる仏の国々の一番いいところをみなとり集めた第一のいい国になる筈のところ——へ迎え入れようというのです。

たとえて見ると一番いい学校をこしらえてそこへどんなやさしい入学試験もメンタルテストさえなしで、それも月謝さえとらないで志望なら誰でも入学させようというのですから世にも有難い話です。

あまり話が結構すぎるので疑い深い人間は、自分たちの浅はかな小さな心で考えて見てこんなうまい話には何かしん底にたくらみがあるのか、さもなければ話全体がうそにちがいないと考えるのはまことになさけない事です。「親の心子知らず」ということわざがあります、「仏の心人知らず」でしょう。また「九尺梯子は九尺だけ」ということわざがあり、「英雄英雄を知る」とも申します。つまり法蔵菩薩ほどえらくなくては法蔵菩薩の大きな慈悲のお心はほんとに判る筈がないのですから、わたくしもなまはんかなことはこれ以上は言いません。

ただ自分の智慧で判断できないほどの不思議な大きなお心のあるのを信じて、感謝することの出来る人と、それが出来ない人とこの二つの大きな区別のなかに、人生を幸福に生きる人と、幸福に生きられない人との分類がはじまるのだということだけを、よくおぼえて置いて貰うことにしましょう。

人の仕合せには貧乏も、金持も、えらい人もえらくない人もあったものではありません。みなそれぞれに楽しみや苦しみがあるので、貧乏人が金持になりさえすれば世の中で困ることは何もないだろうと考えるのは浅はかな間違いです。

金持には人にだまされてお金をとられるのではないだろうかといういやな心配が、いつも心につきまといているもののように見えます。私の知り合いにもそんな気の毒な人がいます。これはほんの一例ですが、同じようにえらい人にはえらい人だけの特別な心配や悲しみがあるもののようなのです。

金持もえらい人にくらべて貧乏でえらくない人でも、すなおに物事や相手の人をいつも信じてよろこび感謝することの出来る性質の人には、苦勞も心配もその種がないわけです。

法蔵菩薩は何人でもわけなく入ることの出来る一番いい国をこしらえるという今までどの仏さまも考えつかず思い及ばなかったところに気がついて、このひとつのことだけでも自分の国は今までの仏の国よりもすぐれたところがあると思うにつけてもますますこの国よりもいい国をこしらえなければならないというはげみが生れました。

そうして、もういつでも仏さまになることが出来るという時に、師匠や先輩の仏さまたちの前に四十八の祈願をしました。

その四十八の願はその事がみな成就しさえしたら、法蔵菩薩のひらく国が法蔵菩薩の理想どおりに出来る筈ですから、この四十八の願は言わば理想の国設計の箇条書きとも見るべきものでしょう。

(以下次号)

旧仮名遣いを全て現代仮名遣いに直しました。
また、幾つかの言葉を現代用語に改めました。
(編集部)

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第六回

土井晩翠との
交遊録 その1



旧知の友に弔歌で献杯

NHKのラジオ番組「光を掲げた人々」の「新しい時代の聖者・渡辺海旭」の回を、まだ空襲の爪痕があちこちに残る杜の都・仙台で、楽しみにしていた海旭ゆかりの人物がいた。「荒城の月」の作詞で知られる国民的詩人、土井晩翠である。

晩翠は昭和二十年（一九四五）七月十日の仙台大空襲で焼け出され、一時秋保温泉の旅館に疎開していたが、仙台市内の寓居に戻って三年ほどが経っていた。昨年は詩人として初の文化勲章を授与され、式典出席のため無理を押して上京したのがたまたまのか、体調を崩して、以来日課であった思索をかねた散策もままならなくなり、自宅で寝たり起きたりの毎日をおくっていた。

鬱々として楽しまない日々がつづいていた晩翠だったが、ある筋から旧知の渡辺海旭がNHKラジオで取り上げられると知らされ、

久方ぶりに高揚感を覚えた。

きょうがその待ちに待った日だった。番組を待ちきれずに一時間も前から寢床をぬけると、和服に着替えて、居ずまいをただして、書斎の机の前にどつかと腰をおろした。

重厚な机の上には、読みさしのホメロス研究の分厚い原書がおかれ、そのかたわらに、「渡辺海旭上人弔歌 土井晩翠作」と頭書された長編の詩が広げられていた。昭和八年（一九三三）一月末、流感で急逝した海旭を悼んで、晩翠が捧げたものだ。原文は先の空襲で消失してしまったが、久方ぶりに海旭と出会うためのよすがとして、教え子に頼んで宗門の機関誌に掲載されたものを探してもらったのである。

もう一つ、普段は机上にはないものが置かれていた。徳利に入った酒である。海旭に盃を献じようという心算であった。身体をそこねてからは、酒は断っていたが、海旭と再会するのだから、きょう一日ぐらいは禁を解い

でもよからうと思つたのである。

晩翠は大の酒好きであつた。第二高等学校（現・東北大学教養部）で教鞭をとつていた時は、毎朝ひや酒を一本ひっかけて講義にかけていくのがならいだった。たまに一本が二本になることがある。学生たちはこれをよく知つていて「先生、きょうはお顔がちよつと赤いじゃないですか」とひやかす。すると晩翠は「いやあ一本よけいにやつてきてね」と上機嫌で、本来のフランシス・ベーコンの講義をそつちのけで、酒談義から詩談義へと縦横に談論が風発する。この脱線ぶりは生徒たちに人気で、いまでも同窓生たちの間では語り草になっている。当の晩翠にとつても懐かしい思い出だった。

——なんとも痛快無比な時代だった。

と晩翠は、昔の教え子たちとのやりとりを思い出して、にんまりとした。思えば、久しぶりの笑いだった。

時計をみると、まだ番組がはじまるまでに

十五分ほどあつた。晩翠は、ラジオのスイッチを入れると、音量を下げた。そして、盃に酒をなみなみとつぎ、海旭が永眠する東京の方角へ捧げると、口元へもつていき、ぐびりと飲つた。

そして、おもむろに自作の「渡辺海旭上人弔歌」をくぐもりがちの小声で吟じはじめた。

土井晩翠作「渡辺海旭上人弔歌」

(一)

波間に掛を折ることし

昭和八年一月の末

(三)

五蘊の集りほどけゆき

理は寂光を慕えども

聖衆来迎の紫の

情は煩惱の暗に泣き

雲に乗りゆく海旭師

ただ惘然と茫然と

謠譽上人高く去る

我を忘れて測りなき

(二)

天のあなたを仰ぎけむ

五天の昔跋堤河

(四)

岸辺に近き沙羅双樹

今はたここに東海の

二千年前大聖の

旭日の邦の仏門の

滅度悲しむ有情の群

子ら英霊の別れより

恩愛の焰胸に熬^いり

無明の涙眼に満つ

(五)

恩は深し深川の

淨利君の西光寺

都門の塵は深くとも

妙境別に風清く

月も澄みけむ西光寺

(六)

室に脂粉の香を絶ちて

夜半の窓に襟正し

梵文貝葉秘を開き

幽を探りて学海の

底に求めて玉光る

(七)

世界の上に斯の道の

ひとつの權威君ありて

西欧に蒔く大乘の

種ぞ尊き幾何の

春秋の後結ぶ実か

(八)

マロニの葉影繁り合ふ

セイヌのほとりリンデンの

街も等しく更に今

狂妄無慙の空ながら

ネワの岸辺も縁あらむ

(九)

更に隣邦中華の郷

江南の梅薫るほとり

誠ひとしき敬信の

群を結び道の上

(夢の一時の乱れなぞ)

(十)

雪山恒河タージリン

ヒマヤン・ジス

夢寐に忘れぬ五天竺

印度の志士に一掬の

熱き涙を注ぎけむ

アタール逝けボースあり

(十一)

大陸の風雲次第に動く

昭和の春に慨然と

亜細亜連盟のおほひなる

理想を胸に描きたる

熱き血日本の子なりけり

(十二)

「連盟」四十余認識足らず

盲は盲の手を引きて

東亜百年平和のもと

愛親覺羅発祥の

満州を知り得ざる時

(十三)

その満州の教化の基

「鏡泊学園」の長として

尽すべかりし明日の命

天か塵界の縁尽きて

わが海旭師今あらず

(十四)

学あり信あり徳ありて

更に稀世の才を兼ね

六十余年塵の世に

宿せし四大その本に

帰れど英霊永く生く

(十五)

三千の子弟共に哭く

教の庭の芝蘭の香

流芳遠く百年の

末に及びて大乘の

道に尽さむ君は生く

(十六)

日輪西に傾きて

懸鼓の如く大空に

燦爛の光放つとき

紫磨黄金のおほひなる

影に伴ふ師を思ふ

(十七)

「娑婆の往復八千度」

その美はしき本生の

譚にこまれる不朽の真理

極楽莊嚴の郷よりぞ

君また穢土に還るべく

(十八)

法門無量誓願学

「衆生無辺誓願度

仏道無上誓願成」

煩惱無尽誓願断

諸善上人永く生く

海旭と晩翠の奇縁の数々

吟じ終えた晩翠の脳裏に、まざまざと往時が甦ってきた。海旭の死は、晩翠にとって、あまりにも唐突で、悲哀と無念の極みだった。近親者から弔歌をたのまれた晩翠に、否やのあろうはずがなかった。かねて海旭の偉業は知っており、仏典にも関心が高かったことであって、勃然と想の湧くままに、一氣に書き上げた。この弔歌には英傑・渡辺海旭をあますところなく収め得たとの自負があった。

東京日日新聞には、当代随一の文筆家である徳富蘇峰から「現代的仏者渡辺海旭を弔す」と題する弔辞が寄せられたが、多くの人々からよほど晩翠の弔歌のほうがよいとずいぶんとほめられもした。

晩翠は、この弔歌を書き上げるにあたって、

海旭の生涯をふりかえって、自らと海旭との深い因縁をつくづくと想ったものだった。

土井晩翠こと本名・土井林吉は、明治四年（二八七二）、仙台に九代つづく老舗の質店の長男として生まれた。片や海旭は浅草の商家の小倅として明治五年（一八七二）に生まれ、ほぼ同年代として明治以降の日本の近代化を見届けながらともに生きた。

晩翠の生家の「土井質店」の近くには星という没落士族の一家が住んでおり、しばしば質草を入れて生活の足しにしていた。その次女に良という当時の規範である良妻賢母の粹には納まりきらない利発だがいささか奇矯な娘がいたが、後に結婚して相馬黒光と号し、事業家として成功、海旭と深い親交を結んだことを知って、なんたる奇縁かと驚いたものだった。

まだまだ奇縁はつづく。晩翠は地元の第二高等学校から東京帝国大学英文科へ進学。そこで「帝国文学」の同人となり、詩才を開花

させるが、東大のあった本郷の博文館から第一詩集『天地有情』を刊行、これが詩壇へのデビューとなる。この博文館で海旭は小僧をしていたことがあった。

また、東京帝大を卒業した晩翠は、明治三十四年（一九〇一）から三年間、ヨーロッパへ遊学するが、海旭もまた、明治三十三年（一九〇〇）に二十八歳で第一期浄土宗海外留学生に選ばれてドイツへ派遣された。晩翠はイギリスはロンドンで夏目漱石などと交わったあと、フランス、イタリア、ドイツをめぐったので、ひよっとしたら、海旭ともすれ違っていたかもしれない……。

●前田和男 プロフィール

1947年東京生まれ。渡辺海旭の母校であり校長をつとめた芝中・芝高60期。東京大学農学部卒。翻訳家、ノンフィクション作家、編集者。路上観察学会事務局。資生堂化粧品文化研究会会員。著作：『MG5物語』（求龍堂）『足元の革命』（新潮新書）など。
訳書：I・ベルイマン『ある結婚の風景』（ハラルド出版）など。

連載

会いたい人
関 容子

佐野成宏さん ①



撮影/タカオカ邦彦

佐野さんの声を初めて聴いたのは平成八年一月、渋谷オーチャード・ホールのオペラ『椿姫』アルフレード役だった。何年か前から、ドミンゴ国際声楽コンクールやパヴァロツティ国際声楽コンクールで軒なみ上位入賞をはたしている期待の新人、と評判だったので、どんな声の人だろうと楽しみにして出かけた。

アルフレードにはまず第一幕最初のほうに「乾杯の歌」というヤマ場がある。客席で待ち受けていると、頭上を一本の光り輝く黄金の矢がゆつくりと走り抜けて行くのを見た気がして陶然とした。テノールの有望な新人は世界でもなかなか出にくいのにそれが日本で、と嬉しくなり、誰かに早く何か言いたくなった。休憩時間のロビーで藤原歌劇団の当時芸術監督だった五十嵐喜芳さんの姿を見つけ、先生の御挨拶？ と伺うと、深くうなずく笑顔がとても満足そうだった。

その後の佐野さんの躍進ぶりはめざまし

く、翌年にはヴェネズエラで『椿姫』、その二年後からは新国立劇場やオーチャードホールで『ラ・ボエーム』『ランメルモールのルチア』『リゴレット』『トスカ』などに出演し、平成十三年にはついにブッチー二の『つばめ』でローマ歌劇場に進出をはたした。そうした消息を聞くたびに、そのデヴィューを観たことが誇らしかった。

さて、佐野さんはどんな幼少時代を過ごしたのだろう。

「長野県の南のほう、駒ヶ根市というところで生まれ育ちました。中央アルプスのふもとで、空気はきれいだし、夏は涼しく、水がおいしい土地です。父は燃料業で、灯油や石油やプロパンガスとかを扱う仕事。母は床屋さん、理髪師ですね。ぼくは小さいときから母に髪の毛を切ってもらってましたから、そのせいでよその床屋さんに行くのが苦手になりました。母にまかせきりだったので、ここを長くとか、ここは短くとか、説明するのに時

会いたい人



2007年9月、石川県立音楽堂での「椿姫」で。

間がかかるのが面倒で」

佐野さんはデヴューのころから立派な体格で、声帯を楽器とする声楽家にとつては非常に恵まれた肉体の持ち主と思えるが、少年時代に大病をした経験があるという。

「三歳児健診で心臓がよくないことが見つかって、小学五年生、十一歳のときに手術をしました。そのときがちょうどクリスマスで、病院の中でヴァイオリン・コンサートがあったんです。子供ながら入院生活で気持ちが沈んでいるときに、美しいナマの音楽にふれて、気分がパア一つと晴れたんですよ。音楽の持つすごい力というものを実感したのはこのときだったと思います。それがのちに合唱にのめりこんでゆく最初のとっかかりだったかもしれません」

テノール歌手というのは、たとえばホセ・カレーラスのように比較的小柄な人が多い。身体が大きいと、それにつれて声帯も長くて

厚くなるので、バスやバリトンになる確率が高い、と聞いたことがある。

「ぼくの声帯は長くて薄くて奥のほうにつくテノールのタイプの様です（笑）。ぼくには変声期というものがなくて、小さいころはアルトっぽいツヤのある感じの声だったのが、自然にいまの声になったんです。うちの親父はかなり良い音感を持つてるんですよ。小っちゃいころからピアノが勉強したくて、学校の音楽室でピアノを練習して、珍しがられて女の子たちに囲まれた、とか言ってます。親父がよく言ってますけど、初めての曲を聴いても頭の中に楽譜が浮かんでくるそうなんです。楽譜を初見で歌えますすね。母親も昔から合唱やってて、いまも続けてます。まあ、音楽好きの一家と言えるんでしょうね」

環境が人を作る、というのは本当らしい。では、音痴というのはどんなものなのか。「音程に対してコントロールできないのがさうでしょう。音楽というのは運動神経ですか

ら、音痴はその欠如だし、耳の問題かもしれないしね。でも訓練で必ず治りますよ」

運動神経と言えば、佐野さんは最初は野球少年だった。

「父とキャッチボールをするのが楽しくて野球が大好きになったんですが、手術をしてからは中学に行ってもサークル活動に参加できずにしばらくおとなしくしてました。でも、歌うことも大好きだったので、二年のときに音楽の先生から合唱部に入らないか、つてすめられて、それがキツカケですっかり合唱にはまってしまうて、十年近くも合唱とともに歩みましたね。合唱の魅力というのは、とにかく人と一緒にいて、心が一つになって、気持ちのいいハーモニーが聞こえて、素晴らしい音楽が生まれる。そのときの喜びと言ったら、ちよつとほかでは得られない幸せな感じがありますね」

佐野さんはそのころ流行ったニューミュージックにも熱中した。

「学校の合唱部では『この道』とか『はつ恋』とか叙情歌が多かったんですが、あとはギターを買って友だちと『アリス』とか『かぐや姫』の歌を歌ってました。松山千春さんやさだまさしさんが大好きで、ぼくはさださんのファンクラブに入ってたこともあるんです(笑)。それでずつとのちに、さださんとジョイントコンサートを開いたときは嬉しかったですね。それからまた何年かして、名古屋のホテルで偶然さださんにお遭いして、これからコンサートです、と言つて練習のあとに会場へ行ったら、楽屋にさださんから花が届いていて、このときも嬉しかった。『さだまさし』というカードはいまも大事に持ってます。ずつとまだファンなんです(笑)」

佐野さんは中学、高校と進み、大学は音大でなく、なんと東京経済大学に入学する。

「経営学を学んで親父の仕事を受け継ぐつもりでした。でも合唱三昧は相変らずで、大学のと、もう一つ武蔵野合唱団という市民合唱

団にも参加して歌ってました。大きな転機が訪れたのはこのときなんです。武蔵野では常任指揮者が小林研一郎先生、あの『世界のコバケン』先生です。ある日、レクイエムのソロ部分を先生の前で一人一人歌わされて、ぼくが歌ったら、君は学生だそうだけど何の勉強しているの？ と訊かれたので、経済大学です、と言ったら、すぐやめなさい、って（笑）。やめて芸大へ入りなおして、歌の勉強をしなさい、って真面目におっしゃるんです。でも入学したばかりだし、はたして歌手が職業として成り立つのかな、とか現実的なことも考えましたからね」

佐野さんが芸大受験のための勉強を始めたのは大学三年のとき。ピアノやソルフェージュ（聴音）とか、かなり大変だった。

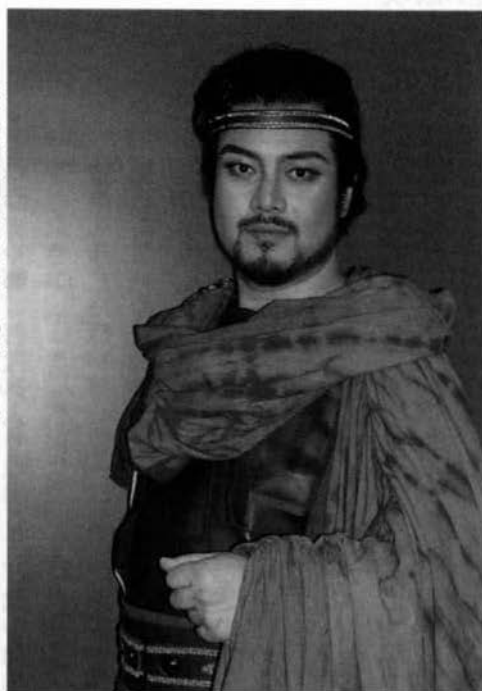
「最初の挑戦は、けんもほろろの感じで落ちて（笑）、四年のときも落ちて、大学を卒業して東京音大の専修コースに一年通って、そ

れで芸大に合格しました。ぼくにとつての難関はピアノで、なにしろ受験を意識してからピアノですから、最初の年なんか三小節行くか行かないかで終っちゃって、ダメ（笑）。でも初めの二年はバッハのフランス組曲というすこい難しい曲だったんですけど、入学できた年からはハイドンのソナタでもよい、ということになって、これはメチャメチャ簡単なんです。それでピアノがクリアできた。まるでぼくが入れるようにレベルを下げてくれたのか、と思うくらい、ラッキーなことでした」

芸大入試の準備期間に入った東京音大で、佐野さんは生涯の伴侶となった美香さんと知り合う。

「ぼくの伴奏を弾いてもらったりしているうちに一緒にいる時間が少しずつ長くなって、しかし結婚までに六年間ありました。ぼくの人生にいろんな意味でこういう人が必要なんだろうな、と思ったんですね。彼女はソプラ

2001年、新国立劇場でのオペラ「ナブッコ」。
佐野さんはイスマエレ役を演じた。



ノ歌手をめざして勉強してたんですが、途中で
あきらめてくれて、ぼくをもっと高みに押し
上げるためには自分は何ができるかと考え
てくれて、そうなったんだと思う。彼女の両親
は藤原歌劇団のテノールとメゾで、お父さん
は東京音大で教えてたんです。授業を手助
けしてくれないかとぼくがときどき呼ばれて
歌ったりして、それからうちに遊びにこない

かと言われて、大船の海の匂いのするお宅にお邪魔して、よく御馳走になりました」

話は戻るが、佐野さんがまだ経済大学在学中、世界的なテノール歌手市原多朗の『仮面舞踏会』を聴いて衝撃に近い感銘を受けたそう。これは昭和六十三年二月の藤原歌劇団の公演で、私もあのときの深い感動は忘れられない。

「市原さんとその時仕事を一緒にされていた経済大学合唱団の指揮者の岡本俊久先生から佐野、お前、多朗さんに声を聴いてもらったかどうか、と言われて、怖いもの知らずというか向う見ずというか、オペラのアリアの勉強も何もしてないのに、一回だけ歌ったことのある『清きアイーダ』を果敢にも（笑）、歌ったんですよ。その後、ぼくが世界で一番尊敬することになる市原多朗さんの面前で、『仮面』の前年の暮れ、『第九』に出演するために帰国したときでした。音楽スタジオの練習室みたいなところで、多朗さんの奥様がピ

アノ伴奏をしてくださって。いま考えても『アイーダ』なんてそうそう歌える曲でもないのに、よく臆面もなく歌ったものです。多朗さんはこう言ってくれました。声は持つてね、これから音楽の勉強をしようとすることは正しいことだと思う。でもぼくは君の先生じゃないから進路について責任のある意見は言えないけど……と、ぼくの持つてた楽譜帖を手にとって、バラバラとめくって、それで伴奏を奥様が弾き出したら『トス力』の最初のほうのアリア『妙なる調和』だった。じゃ、一曲だけ君に歌うよ、ってぼくの目の前で歌ってくれて、いやあ、素晴しかった。音楽ってこういう感銘を人に与えることができるんだなあ、と思って、本当に心底感動して、ふるえが止まらないくらいでした。まだ将来も何もわからない経済大学の三年生のために世界のテナーが歌ってくれるなんて……と、いま思い出してもふるえますね」

(つづく)

安心起行の要は、念死念仏にあり。

（二祖・聖光上人「四十八巻伝」四六）

浄土往生に向けた私たちの心のありようと修める行のありさまの肝要は、常に自分自身の死を念頭におきつつ、ただひたすら「南無阿弥陀仏」とお念仏を称え続けることに尽きるのです。

旅立つ前に

「阿部君!」「ハイ!」「石川君!」「ハイ!」…。「○○先生、ここが分かりません。」「そうか、それなら一緒に考えてみよう。まずは…」

毎日、そして、毎時間、どの学校でも繰り返されている光景ですが、この光景は、先生から生徒へ、生徒から先生への呼べば応えるという二重の関係性があつてこそ、そして、お互いが一堂に会することができる学校や教室という〈場〉があつてこそ成立します。もちろん、学校や会社に限らず、町内会の会合や草野球の試合でも、コンサートや観劇でも、細かいTPOこそ異なれ、人と人との相互関係と、人と人との出会いの〈場〉との両者があつてこそ成立し、それこそが私たちの社会生活そのものと言えます。私たちは、人と人とのふれあいによつて心が傷ついてしまうお互いですが、その一方で、人と人とのふれあひなしには、悲しくて、寂しくて、辛くて、いてもたつてもいられないお互いなのです。私たちは、かけがえのない大切な方とのふれあひがあつてこそ、心からの安らぎを得られるのであり、誰しも人は、それを望んでいるのです。誰しもに共通するそうしたい思いは、命の終焉を迎えようとも変わるものではありません、いや、自分自身の命の終わりを目の当たりにするからこそ、改めてその思いが募るのかも知れません。かけがえのないお母さんの手を握りしめ

ながら、その命の終焉の場に立ち会った娘さんが、新聞に投稿された素敵なエッセーは、改めてそうした思いの深さを教えてくれます。

あっぱれな旅立ち

練馬区・高橋深雪さん（七八歳）

（前略）静かで穏やかな顔だった。最後の握手に何かの意味があるに違いない。そう思っ、母の日記を開いてみた。すると、一枚の紙が出てきた。「旅立つあいさつ」とおぼつかない字ではあるが、勢いよく書かれている。生前にお世話になった方々へのお礼文だった。「今回、私は、あの世に行くことになりました。長いこと、この世でお世話になり、ありがとうございました。ひとり旅ですが、心配ないと思います。あの世で長いこと、私を待っている大事な人に電報を打ってあります。待ちかねて迎えに出ていることでしょう。喜びも半分、不慣れで心細さもありますが、待つ人に会える楽しみもあります。この世の皆様へ」お母さん、あっぱれよ。

（平成二年三月二五日 朝日新聞朝刊「ひととき」から）

一〇三歳で亡くなられたこの奥さまは、「この世でお世話になった方々」への感謝の思いを綴りながら、「あの世で長いこと、私を待っている大事な人」との再会を思い描き、それが「死」への不安を一掃しているかのようです。

阿弥陀さまは、私たち誰しもが抱く、そんな「死」への不安を十二分にご存じで、だからこそ、私たちのためにかけがえのない大切な方との再会——俱会くえい——処しよ——が叶う《場》であるお浄土をご用意して下さいました。とはいえ、そのお浄土に辿り着くことができなかったら、それこそ、大切な方との再会は叶いません。だからこそ私たちは、命を終えた後の行き先を阿弥陀さまのお浄土にしっかりと定めておきましょう。そして、阿弥陀さまご自身の「わが名を称えれば、必ず私があなたを浄土に導こう」という誓願を信じ、日々、「お救いください、お導きください、南無阿弥陀仏……」とお念仏を称えて参りましょう。

私たちは、人と会う際、電話をかけたり、手紙を書いたりして、予め時間と場所を決めておきます。それと同じように、阿弥陀さまのお浄土にお導きいただくのですから、お念仏という阿弥陀さまへの事前連絡は不可欠です。もちろん、その時がいつなのかは誰にも予想不可能ですので、冒頭の聖光上人のお示しのように、自分自身の死を見つめて、お念仏を相続することが大切なのです。この奥さまが出された「あの世」への電報のように、私たちも、阿弥陀さまと、そのお浄土から私たちのことを常に見守って下さる先立たれた方々への思いを乗せたお念仏という電報をお届けして参りましょう。

合掌

(林田康順)

素直になりたくても、
なれない
心を

抱

きしめる

心

偏差値世代を生きるカウンセリング

子ども家庭教育フォーラム
チーフカウンセラー

萩野ゆう子

私はカウンセラーを生業として、この20年、多様な世代の方々と出会っている。

親子・夫婦・家族・職場での人間関係の悩みをきっかけに、街角の小さな相談室に幅広い年代の方々が訪れてくださっている。

そして、その多くが「こんな自分でいいのだろうか」という自分のあり様に戸惑っている。親御さんであれば、わが子の悩みは、親としての自分の生き方を突きつけられる思いを抱えていることは少なくない。

それどころか、自分の生き方を否定されたように感じてしまうあまりに、自分の「問題」とするには辛すぎて、「あの子さえ元気になるれば」と子ども自身の「問題」にしておきたいとする人も少なくない。

悩みや苦しみは、一所懸命に生きているからこそ生まれるものであるのに、私たちは悩んでいる自分自身を否定したくなるのである。

それゆえに、人間関係に悩みを抱えているときほど、人となることが大切である。ひとりぼっちではないという思いは、悩みを背負って生きていく後押しになるものだから

である。

人は悩みを抱えた時ほど、わが身の孤独をかみしめることはない。

そう思うと、悩みそのものよりも、孤独からいかに解き放たれるか、その術を身につけているかということが、自分自身につきつけられてくるのであろう。

孤独を抱えたら、自分から素直に人を求めていくしかないということである。人に甘えるといいかえることもできるだろう。にっちもさっちもいかないう自分を強がらずに、開き直らずに語れてこそ、人は人となることができる。悲しみや苦しみは実は、人間関係を深めていく後押しになっていると思う。

なぜなら、相手を信じることなくして、人は容易に情け無い、「ダサイ」自分をさらけ出すことはできないからである。

私はカウンセリングとは、人が人の中で生きていくためには、人とながつていくしかないという原点の学びであると思っている。そして、それは愚直に生きることと決して無縁ではないと思うのである。

しかし、愚直になれない、素直になれない、甘えられないのである。これは、人間関係の葛藤となり、自ら孤独を招き入れることになる。だからこそ、生きていくことそのものに関わってくることなのである。

不登校や引きこもりの子どもたちや青年たちの苦しみも、その根っこに「素直になれない」悲しみがある。それは、彼らが育ちの中で信じて向き合うことでしか生き延びていけないということ、親子関係の中で学んでこなかったからである。

そして、素直になれない心はインターネットの「掲示板」やメールのやりとりにより替えられてしまう。人と関わりたいけど、傷つきたくないからワンウェイコミュニケーション（一方通行）になることで、心と身体が乖離した人間関係になっていくのである。

そう思うと、誰もが素直になれない悲しみを抱えて生きているのではないだろうか。それ故に、傷つけられない人間関係として、カウンセリングが求められているのかもしれない。だとしたら、カウンセリングも気づかな

いうちにワンウェイコミュニケーションになる可能性も否めないのである。

傷つくかもしれないという不安を抱えつつ、愚直な自分を語ってくれた勇氣に人は、その関係を大切にしたい思いを深めるのである。にもかかわらず、何故なかなか素直になれないのだろうか。

そこに素直になる怖さがあるのではないかと思うのである。それは、人から評価される不安である。自分の気持ちや思いを相手はどう受けとめるのかと思うほどに心の「手の内」は明かせないだろう。

「子どもの成長する姿が私の子育ての通知表です」と、相談室で呟いた30代の母親の言葉を思い出す。

人間関係や子育ては手間暇かかるものであると、知識として理解していても、成果として目に見えるものでなければ納得できないのである。それは偏差値教育で常に評価にさらされてきたことで自分自身をも評価するという感性を身につけてきたゆえである。

私自身、偏差値世代であり、彼女の言葉は

他人事には思えない。私がカウンセリングを学んでいる原点に、人と自分を評価、比較してしまふ心の癖があることは否めないのである。

そんな心の癖は、自分が今以上も以下もなく今できる努力を精一杯しているとは思えない葛藤を生むのである。子育てや人間関係を評価の対象としていくことは、ままならない現実を抱えたとき、親としての原点を見失わせてしまうものである。それは、無力な自分を許せないという苦しみを抱えていく。

親として無力な自分を感じつつ、わが子との関係を投げ出さずにいることそのものの尊さに気づけなくなるのである。しかし、何よりそれが親子関係のあり様であり、人間関係の原点なのである。

「わかつてくれなくても、わかつてくれようとする(親の姿)が嬉しい」というのが子どもの親への気持ちであり、願いではないだろうか。

しかし、短時間で効率よく成果を上げなければ「勝てない」競争社会では、そんなけな気な子どもの気持ちは切り捨てられていく。考えてみれば、今、子育てで真つ最中の親御さ

ん自身が親に「わかつてもらえなかった」という子どもの悲しみを抱えたまま、親になっている。努力しても報われなかったとき、その悲しみをただ聴いてほしかったのに「努力が足りなかった」とか「努力の仕方を変えたらいい」と、「叱咤激励」されて流されていったのである。

私たちはままならない現実を生きているという感性を高度経済成長から浸透していった成果主義の中で、見失ってしまったのではないだろうか。そして、ままならない現実を背負っていくためには悔し涙を流せる人間関係が必要であることを置き去りにしてしまったのである。誰もがしんどさを感じつつ、語れない息苦しさを抱いていると感じずにはいられない。

A子さん(39歳) も人に語れない息苦しさを抱えつつ、相談室を訪れた。

大手家電メーカーに大卒後「一般職」で入社して16年が経っていました。「専門職」の同期女性社員もほとんどが結婚し、30人近しい同期のうち、独身はA子さんを含めて2、

3人となっていた。

「結婚したくないわけではありません。これまでにお付きあいした方は、どの方も結婚を考えていました。でも、気づいたら16年も会社勤めです。キャリア志向の「専門職」の子がさっさと嫁にいつて…あの自分で言うのもなんですが、私、「合コン」とかでも引きが強い（人気がある）方です。でも…土壇場でうまくいなくて…結局自分で別れるきっかけを作ってしまうんですよね…」と、A子さんは自らに言い聞かせるかのように呟きました。

「ご自分で別れるきっかけを？」と私は口を濁しているA子さんの戸惑いを尋ねた。

「あ、あの、素直じゃないんですよ。相手を困らせるような事を言ってしまったって、謝らうって、喉元まで言葉はきているんだけど、言えなくて…私が一人でいじけっぱなしで、相手はワケわかんないから怒るじゃないですか。そしたら私『もういいよ。別れる』って言うってしまうんです。本当は思ってもないくせに…」と言うとA子さんはため息をつきました。

「素直じゃない自分は、ご自分でも持て余し

てしまうでしょう」と私はA子さんを察してみしました。

「そう、でももう『アラフォー』（40才前後）でしょ？ この歳になると『婚活（コンカツ）』なんて言えるほど余裕はありません。好きでも（結婚の）可能性が薄いのなら、サクッと終わらせたくないんです。私のプライドですね…。それに仕事や自分の時間、お金とか秤にかけることも色々あつて…ここまで仕事してきたから、辞めたくないんです。結婚することに合わせてるんじゃないんで、私の今の生活に結婚を合わせたいんですよ」

「自分ばかり何かを捨てていくような悔しさもありませんか？」

「ありますよ。『結婚なんて人生の通過点の一つじゃない？』と冷めていながらも、とっても意識しているんです。何で私には（結婚が）手がなかなか届かないんだろう？ っって…」

「自分だけ置き去りにされたような気持ちなんですか」

「そう…少し古いですが、『負け』を感じています。だから、そんな負い目たっぷりな自

分を相手に見透かされたようになって……『結婚したい』感を匂わせないっ！　みたいな』と、A子さんはテンポよく話していました。

「それは、張り合っているみたいですね？」

「いや、戦っているんですよ。少なくとも私からけしかけていますね。笑っちゃいますよねえ。結婚したいと思っている人にけんかを吹っかけているなんて……これじゃあ、家族にはなれませんよね……」と、苦笑いのA子さん。

「ご自分の結婚のイメージが見えてきましたね」

「はい。結婚が自分を追いつめていたことに気づきました。結婚しない私を私が責めていた気がします。結婚にこだわらなくていいんじゃないって気持ちですが、ひっかかっていたんですね」

A子さんは、はにかむような表情を浮かべて微笑んでいました。素直になれない気持ちに辿っていくと、一生懸命踏ん張っている心が見え隠れしてくるものである。

自分でも持て余してしまふ感情には、実は自分自身が気づきたい心があるのだらう。だから、素直になれない心と向き合ったとき、

本当に自分自身が求めている気持ちが見えてくるのである。

誰もが自分がこれまで生きてくるなかで、大切にしたいあまりに頑固になってしまふ部分を持っている。それは、人から見れば、他愛のないさ細なことであるが、それだけに譲れないものである。

それこそ、素直になれない心の根っこにその人の本質がある。だから、「困ったもんだ」と流さないで、素直になれない心を誰かに話しながら掘り起こしていけばいいのだ。私が今、ここに生きている意味、使命は素直になれない心を自ら語っていくことでこそ実感できるのである。

素直になれないと人からはぐれていくけれど、その心を語るとつながっていく。素直になれない心を許して語ることが、一人ぼっちにならないで、自分の本質にも出会っていく生き方ではないだらうか。そしてその営みに愚直に生きることを重ねてと思わずにいられない。

素直になれない心を抱きしめた時、愚直に生きるということに近づけそうである。

朝めしは「梅干」から始まる

拙著『朝めしの品格』の「朝めしの友」は梅干から始まります。それは、和の朝めしのスタートを「お茶と梅干」と置いたからです。

渋茶と梅干のニガスツパシヨツバさが、口中はもちろん寝ぼけたアタマもカラダも目覚めさせ、かつ断食明け（英語で朝食を意味するブレイクファストは「断食を破る」という意味があると一回目に言いました）の胃袋を刺激して、「これから朝めしを食うぞ」という気分させてくれる——という意味で、梅干は朝めしの重要なアイテムだと思っています。

とはいえ、外国人にとってはこれほど摩訶不思議な食べ物はないでしょう。ただスツパくてショッパいだけ。しかし、日本人はこの果実の塩漬けを大昔から大事に愛で、また尊敬してきたのです。

このお茶&梅干は、元日の朝に汲んだ水（若水と言います）で淹れたお茶に梅干を入れれば福茶（服茶）と呼ばれます。ところによって昆布などを入れたりもするようですが、江戸・元禄時代に書かれた食用・医用の本草（薬草）の書『本朝食

鑑』には、「福茶の茶は百草の魁（さきがけ）、梅は百花の魁という二つの魁で初春の神を迎える」という意味と、「茶の芳苦（かおりにがみ）は胸郭の鬱を清めて一年のけがれを祓い、梅の酸鹹（すいからみ）は胃腸の毒を泄（くだ）して一年の疫邪を駆逐する」とされているそうです。

そもそもは宮中の儀式で、平安時代の中頃、時の村上天皇が病気の折、梅干と昆布入りの茶で治療されたことを故事とするそうですが、これらのことからわかるように、梅干はそもそも薬用でした。

有岡利幸著『ものと人間の文化史99 梅干』（法政大学出版局）に紹介されている日本各地の梅もしくは梅干による民間療法の効能によると、風邪と風邪の咳止め／腹痛や下痢／歯痛／頭痛／扁桃腺炎／解熱／疲労回復／夏負け・暑気あたり／食べ過ぎ・気付け薬／食欲不振／二日酔い／強壮剤／毒消し

……と多岐にわたっていて、現代医学でも「酸っぱさが唾液の分泌を促して消化・吸収を助ける」

“酸っぱさの元であるクエン酸が乳酸などの疲労物質を分解して疲労回復させてくれる”、抗菌・殺菌作用がある”などは認められています。にぎりめしや弁当箱に入れる梅干は、単にめしを食うためのおかずではなく、食欲増進・疲労回復・ごはんの腐敗防止など、さまざまな意味があったのだと思います。

だから、戦国時代には兵糧食として重宝されました。保存性がよく携行に便利で、梅干一粒でめしが食べられるというだけでなく、傷の消毒や食中毒伝染病の予防にも必要だったといわれ、近代になって日清・日露・第一次大戦でも軍需が急増し、いま梅干の産地として有名な和歌山県南部はこれで発展したのだそうです。

梅干のすごさは、きちんと漬ければ（青梅の重量に対して塩三割）百年以上も持つところで、そういうところも日本人が梅干というものを尊敬してきた所以だと思いますが、残念ながら市販のそれには期待できません。ばかりかそれらには消費期限さえ付いています。

市販の梅干のほとんどは、塩分取り過ぎとかスッパ過ぎるということなどから、流水で塩分を取り除き、あらためてうまみ調味料の液にどっぷり漬けたりしているからですが、こんな梅干に本来の疲労回復や毒消しの力があるとは思えません。

では、どうするかというと、友人知人など誰かがきちんと漬けたものをもらう以外は、自分で漬けるしかありません。面倒くさいと思われるかもしれませんが、そんなことはなく、ぼくがいま住んでいる借家の庭に梅木があり、毎年ではないけれど梅の実をつけてくれるので、実が大量になれば熟すのを待ってそれを漬け、ダメな年には近隣の八百屋に梅干用の梅が出回る時を逃さず手に入れ、それで漬け込み、何とか自分用の梅干しを賄ってきました。

で、今年はいえ……あまりに上に伸びすぎ、梅の木に対して、昨年末に枝打ちを大家に頼み、バツサリといったために、見上げてても梅の実の一個も見当たりません。

江戸を歩く

第二十八回

森清鑑

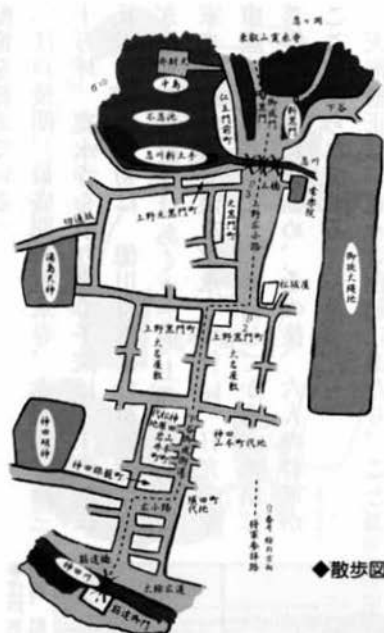
大江戸ウォーカー

神田川から忍ヶ岡（上野の山）へ

將軍の寛永寺参詣は筋違御門を抜け神田川筋違橋を渡り、火除広道に出る。北に二角ほど進むと神田明神表門沿いの街道と交差。その一画に長方形の広小路がある。これを斜めに横切つて東側から北に向かう下谷御成街道に出る。道の左右は神田旅籠町、須田町などの代地である。この家並みを四つ角ほど行くと、大名屋敷の長屋堀に囲まれるようになる。大名屋敷は左に伊勢亀山藩、石川主殿守九千四百坪、右に下総高岡藩井上筑後守四千六百坪で終わる。この堀が途切れると、湯島天神男坂から下ってきた道に出る。そこを右に曲がり、ちよつと行つて左に曲がると上野広小路である。角の右手に呉服店、松坂屋。寛永寺の火除地として、また將軍参詣のため、道幅は極端に広い。この広小路そのものがすでに東叡山領である。通称、下谷広小路。江戸を焼き尽くした明暦の大火後、防火、類焼防

止のため、道幅を極端に拡げた造成地。そして元禄の頃から、名物や名産を売る店が立ち並ぶようになる。松坂屋は、越後屋や大伝馬町の大丸屋と並ぶ江戸有数の呉服店。広重が描いた「下谷広小路」は、右手中央に松坂屋、道は左手、寛永寺黒門の方に向かう。松坂屋の前に、お揃いの傘をさして上野の山へ桜見物に赴く一行。町民に混じって武士の姿も見える。道の右側に並ぶ店の背後には、御徒組の屋敷が併行して密集している下谷御徒町がある。

もう少し歩くと、湯島天神切通坂を下ってくる道が左側から合流。その目前に不忍池から広小路を横断して流れる忍川がある。川には橋が三つ架かっており、三橋と呼ばれた。中央の橋を大名行列が渡るうとしている。長谷川雪旦はこの広場の光景を手取るように描いている。橋の左手の家並みは元黒門町（池之端）。黒門町という名称はこの辺りあちこちにある。右側の家並みが六阿弥陀、常楽



◆散歩図

院門前町。忍川を渡って左、不忍池に面して並ぶ仁王門前町（嘗て広場に仁王門があった）。右側の密集地帯が同じく仁王門前町や北大門町。江戸の家並みはきちんと区画整理されており、町全体としての美観が整っている。上野の山からの土手が左右から細長くせり出しており、その外側に沿って中央広場から逆ハの字に分かれる道がある。左側の道は不忍池をなめ、右側の道に入ると五条天神があり、土手に続く上野の山、寛永寺子院に沿

◆広重画「下谷広小路」



って右に曲がる。すると、道幅は広くなる。火除地広場、上野山下である（上野駅前広場）。この広場の南側には水茶屋、料理屋、講釈場、見世物が出て、大変な賑わい。上野広小路に戻って、左右に突き出た土手の中央を直進すると高札が立っており、上野の山に行き止まる。左側に門が二つ。御成門と黒門である。ここからが東照宮と寛永寺への主参詣道。右側の新黒門からは北に連なる寛永寺子院に通じる道がある。

寛永寺

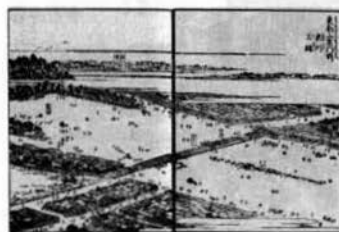
東叡山寛永寺。開山は南光坊天海、開基は徳川家光。本尊は薬師如来、天台宗の関東総本山である。天海は家康、秀忠、家光三代のブレーンとして仕えた僧で宗教上の見地から江戸の都市計画にかなり関与しているものと思われる。江戸城の南、裏鬼門に当たる増上寺に対して、北の鬼門封じに寛永寺の創建を進言。大手門から時計回り、渦巻き状に堀を

巡らし、城から放射線状に五街道を走らせ、その交点に有力な神社、仏閣を配置。

天海の大寺院造営の意向を知った秀忠は元和八年（一六二二）、それまでは藤堂高虎等三大名の下屋敷であった、この上野の土地を天海に与える。以降、家光が寛永二年（一六二五）に本坊、四年に法華堂、東照宮など、八年に清水観音堂、五重塔を建立。そして綱吉の時代、元禄十一年（一六九八）に大規模かつ壮麗な、根本中堂が完成し、壮大な伽藍配備を終えている。

江戸後期、最盛期の寛永寺、寺域は、約三十万坪。寛永寺を取り巻く子院は三十六院に及ぶ。創建当初は、徳川将軍家の祈祷寺に過ぎなく、菩提寺はあくまで増上寺であった。家光が自分の葬儀を寛永寺で行い、日光の家康廟近くに葬ることを遺言してから、次第に菩提寺の色彩を強め、その後、六人の将軍がここに葬られている。

天海僧正は、寛永寺創建にあたり、ことこ

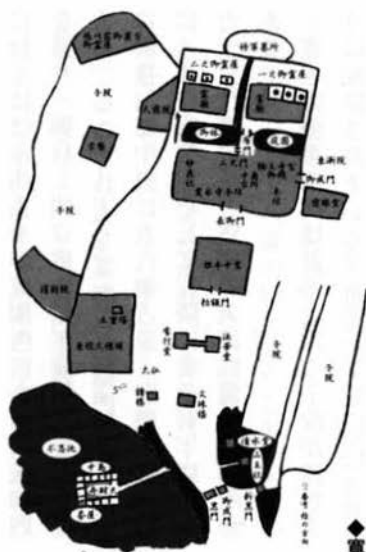


◆江戸名所図会 東叡山黒門前、忍川三橋

とく自分が修行した比叡山延暦寺を模倣している。まず名称。延暦年間に建てられた延暦寺にならって寛永年間に建てられたから寛永寺。東の比叡山ということで山号は東叡山。京都清水寺にならって建造された清水観音堂。延暦寺の根本中堂になぞらえた、豪壮な中堂、眼下の不忍池を琵琶湖に喩え、池の中央にある中島を琵琶湖の竹生島ちくぶじま法厳寺弁財天に見立て、弁財天を置く。不忍池を放生池となし、蓮を植え、山を吉野にちなんで桜の木で覆ったのも彼の発案である。

伽藍配置

当然の事ながら、將軍一行は御成門から入る。左手に不忍池が広がる。美しい光景である。門を通ると、すぐ右手に曲がりくねった、細い山道。行き着く先は山王社。ここを過ぎると、右手、小高い丘の上に瀟洒な清水堂。規模は小さいが京都清水寺の舞台と同様の造りが池に向いている。そして参詣道中央に文



◆寛永寺伽藍

珠楼（吉祥閣）が聳えている。その左手に大仏と「今鳴るは 芝か上野か 浅草か（江戸川柳）」で有名な時の鐘。広い参道の中央を遮るかのように横に並ぶ、法華堂、常行堂。その左手に、東照大権現宮に至る参詣道が見える。この参道に入ると、左右に多数の大名が寄進した、大きな灯籠が林立。右手に寛永十六年（一六三九）建立、高さ約三十六メートル、華麗な細身の塔身が一際目を惹く五重塔が聳える（上野動物園）。將軍はこの家康

を祀った東照大権現を参詣した後、もとに戻り、法華堂正面の広大な広場に立つ、正面二十五間（約四十五メートル）、側面二十三間（約四十二メートル）の豪華、壮麗な根本中堂に赴く。（現在噴水のあるところ）。広場の両側には、区画された松原の堤が点在している。根本中堂の先は本坊（国立博物館）である。本坊表御門を入ると、御式台、台所、中奥、輪王寺宮御殿などが林立している。天海亡き後、寛永寺三世貫主になったのは、後水尾天王の皇子、守澄法親王^{しやうさつしんのう}。以後、幕末に至るまで寛永寺貫主は代々、皇族が受け継ぐ。貫主は「輪王寺宮」と称され、徳川御三家に匹敵する格式を持ち、比叡山天台座主、日光山を統括する、いわゆる「三山管領宮」として絶大な宗教的権威を持っていた。これも天海と朝廷との深い繋がりがから発しており、現に彼は家康の参謀として、政治的にも朝廷との交渉を行っている。こうしたことから、寛永寺は、徳川將軍家と朝廷との親密な関係を

結ぶ場と位置づけることができる。細い川堀が寛永寺本坊全体を囲っている。本坊の裏手に庭園。弁財天、池、竹林が織りなす名園である（現在もある）。庭の左側に接して道があり、そこを歩むと御唐門。これを潜ると徳川將軍家、一之御霊屋である。御霊屋は一之御霊屋と二之御霊屋に分かれる。中央は堤で仕切られている。右側の一之御霊屋は唐門を潜ると眼前に壮麗な権現造りの霊廟。墓所の建物は四代家綱公、十代家治公、十一代家斉公の順で東に並んでいる。そして二之御霊屋に行くには本坊裏手の庭園西にある二天御門を通り、御林（国立博物館平成館）を回って入る。ここも壮大な霊廟（勅額門から入る）に隣接して中央に五代綱吉公、右隣の堤沿いに八代吉宗公、そして左隣に安政五年に没した十三代家定公と正室の天璋院篤子の墓所がある。

寛永寺の東西には計三十六の子院が囲むように配置されている。再度、入り口に立ち、



◆江戸名所図会 中央右、常光堂、法華堂、その下に鐘楼、五重塔、左根本中堂

右手の新黒門から入る。北に向かつて両側に子院が立ち並んでいる。それぞれの敷地は、かなり広い。道の左側には本覚院、凌雲院（東京文化会館）から順に六院、右側には普門院、常照院に続いて九院が並列している（上野駅を含むJR線路全域）。これらの子院は、明治以降、寛永寺輪王殿と併せて国立博物館の右側に移転している。そして寛永寺西側一帯は、東照宮裏の広大な護国院（上野高校）から始まる十八の子院が將軍御霊屋の先まで寄り添うように存在している（東京芸術大学など）。その中央に、三つの学寮がある。西側子院の一つ、大慈院は將軍二之御霊屋の左に隣接してあるが、明治維新の際、十五代慶喜は当院に謹慎したのである（現在の寛永寺）。また、この子院群の北西の先端部に広い徳川家御裏方御霊屋が左右に広がっている（ここから谷中霊園）。

天海は家光まで三代の將軍に仕えたが大変な長生きで、寛永二十年百八歳で没したとい

われる。となると、忍ヶ岡（上野の山）に寛永寺を創建したのが寛永元年（一六二四）であるから、八十八歳の時ということになる。「氣は長く つとめはかたく 色うすく 食ほそうして 心ひろかれ」。ある時、家光から柿を拝領。彼は食べると種を懷に。家光がどうするのかと聞くと「この種を植えます」。「百歳になろうという老人が無駄なことを」と家光がからかうと「天下を治める人がそう性急ではいけません」。何年か経って今度は天海が家光に柿を献上。「どこの柿か」と家光。「拝領した柿の種が実をつけました」と答えたという。慶安元年に天海が着手した「寛永寺版大藏經」が完成。墓所は日光。家康、家光廟の側に眠っている（輪王寺慈眼堂脇）。

暑中御見舞申し上げます

平成二十一年

浄土門主

総本山知恩院門跡第八十七世

坪井俊映

大本山 増上寺
法主

八木季生

大本山 百萬遍知恩寺
法主

服部法丸

〒606-8225 京都市左京区田中門前町一〇三

大本山くろ谷金戒光明寺
法主

高橋弘次

大本山清浄華院

法主 伊藤唯眞
執事長 吉川文雄

大本山善導寺
法主

阿川文正

大本山光明寺
法主

宮林昭彦

鎌倉市材木座六・十七・十九

浄土宗宗務総長

里見法雄

大本山増上寺顧問
浄土宗大願寺住職

神谷英敏

法然上人御誕生地

美作 誕生寺

〒709-3002 岡山県久米郡南町里方八〇八
TEL 〇八六七 (二八) 二二〇二
FAX 〇八六七 (二八) 二二六二

暑中御見舞申し上げます

平成二十一年

函館 称名寺

〒040-0055 函館市船見町十八、十四
電話 〇一三八（二三）〇五七四

(学)大乘淑徳学園理事長
淑徳大学学長

長谷川匡俊

〒174-8665 東京都板橋区前野町五、五、二

学校法人 淑徳学園

理事長

麻生諦善

淑徳SC中等部・高等部
校長

森敬吾

塩竈市
雲上寺

東海林 良雲

本應寺

熊谷靖彦

〒844-1411 熊野市塩田津中町

学校法人佛教教育学園
学校法人東海学園

理事長

水谷幸正

弘経寺住職

金田進徳

〒302-0023 茨城県取手市白山二、九、二八

愚鈍院 こつぶがや文庫主

中村瑞貴

〒984-0051 仙台市若林区新寺三、十二、十七

吞龍上人祈願所

十八樹林霊場会

蓮馨寺

住職

糸原恒久

〒350-0066 川越市連雀町七、一
電話 〇四九（二二二）〇〇四三
FAX 〇四九（二二六）〇六七六

養蓮寺

田中光成

〒194-0032 町田市本町田三六五四

暑中御見舞申し上げます

平成二十一年

赤坂六地藏尊

浄土寺

〒107-0052 東京都港区赤坂四、三、五
電話〇三(二五八三)三六三〇

明福寺

福井豊信

〒132-0013 江戸川区江戸川三、八、一

鶏頭山安樂寺

飯田實雄

〒399-4115 駒ヶ根市上穂栄町九、五
電話〇二六五(八三三)三三六〇

宗源寺

齋藤价洲

〒110-0015 台東区東上野五、一、六

清水湊

忠高山
實相寺

勝願寺

〒365-0038 埼玉県鴻巣市本町八、二、三二
電話〇四八(五四一)〇二二七

骨仏の寺

一心寺

〒543-0052 大阪府天王寺区逢阪二、八、六九
電話〇六(六七七一)〇四四四

白本尊阿弥陀如来

静岡
宝台院

住職 野上智徳

貞松院住職

山田和雄

〒392-0004 諏訪市諏訪二、一六、二二
電話〇二六六(五二二)一九七〇
FAX〇二六六(五二二)三四四六

〒112-0002 東京都文京区
小石川三丁目十四番六号

無量山
傳通院

電話〇三(二八一四)三七〇一(代表)

暑中御見舞申し上げます
平成二十一年

定義如来

極楽山 西方寺

〒989-3213 仙台市青葉区大倉字上一
電話 011-111(111) 11011
Home Page: <http://www.johgor.jp/>
E-mail: sahouji@johgor.jp

花巻 廣隆寺

谷地玄雅

九品阿彌陀如来

淨眞寺

〒158-0083 世田谷区奥沢七、四一、三
住職 清水英碩

願行寺住職

佐藤成順

〒140-0004 品川区南品川二、一、二二

大吉寺住職

成田昌憲

〒154-0017 世田谷四、七、九

梅窓院
住職

中島真成

東京都港区南青山
2-26-38
電話 03 (3404) 8447
ホームページ
<http://www.baisouin.or.jp>

鎌倉大仏殿

高德院

〒248-0016 鎌倉市長谷四、一、二八
電話 0467(222) 0703
FAX 0467(222) 5051

天光院 老納

真野龍海

<http://www.evam.ne.jp/tenkoin/ryunano@nifty.com>

光円寺住職

佐藤良純

〒112-0002 文京区小石川四、一二、八

光取寺

大室了皓

〒141-0021 品川区上大崎一、五、一〇
電話 03(3444) 8384

浄土誌上句会

FORUM
浄土の広場

●橋

〔特選〕橋ついとくぐりて行きし雨燕

大橋まさ子

餌を探して飛び回る燕が、ついと橋をくぐって行つた。しとしとと雨が降っているのだらう。天気の良い日は虫が低く飛ぶから、当然燕も低く飛ぶ。橋をくぐって行つたというのは、その辺を伝えている。

〔佳作〕川風を受けて夏めく橋渡る

金谷 友江

逃げ水を橋間石がさまよえり

斉田 仁

鐘鳴りて橋の下から暮れてゆく

村松 芳郎

●学

〔特選〕囀りにカーテンをして画学生

浜野 具円

画室の明かりは一定しているのが望ましいから、窓に直接日の射す方角を嫌うのだが、画学生には自由に選ぶこともできなからう。

カーテンで日光を調節するほかない。窓外からの小鳥の声も上の空だろう。

〈佳作〉花祭り学生バンドを先頭に

金谷 友江

仕出し屋の学園に来る薄暑かな

浜野 東柳

学びの庭尊徳像の苔落とす

石原 新

●自由題

〈特選〉噴水の大きい方がお父さん

植田 天治

父親と公園に来た。噴水を見つけて近寄っていくと、しぶきを含んだ風が涼しい。数本のうち一番高いのを、あれはお父さんだと指を指す。当然これはぼくというのが続くはずである。巧まず楽しい一句になった。

〈佳作〉緑陰に四方山話きりもなし

佐藤 雅子

はなみずき際立つ家が友の家

鈴木真理子

色屋根の増えしわが町夏兆す

村上 青女



誌上句会〈編集部選〉

■橋

卯浪立つ瀬戸の大橋渡りけり

夕虹は彼我の世つなぐ橋ならむ

浄土への懸け橋となれ虹の帯

鈴蘭の君影橋に恋偲ぶ

杜若繋ぐ木橋の新しき

堰越えの落ち葉ゆつくり橋ぐる

河合富美枝

中島富士子

佐藤雅子

工藤浄真

増田信子

浜口佳春

■学

学僧に女人も混じり雲の峰

晩学のパソコン叩く春の月

佐藤雅子

河合富美枝

浄土誌上句会の お知らせ

兼題

季語ではありません

締切・二〇〇九年七月二十日

発表・『浄土』二〇〇九年十月号

選者・増田河郎子〔南風〕主宰

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

●葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下

さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

■自由題

山藤の風柔らかく鳥を呼ぶ

新緑の奥へ奥へと行く羽音

聖五月亀苔むして沈みけり

小石より土の冷たき裸足かな

回想の書簡を捲る初夏の蔵

竹皮のぐんぐん剥ける午前中

草萌えの地に行商の荷を解きぬ

船虫と遊べり二三踏み潰し

中島富士子

飯島英徳

工藤浄真

目黒 裕

斉田 仁

工藤 掉

河合富美枝

小林苑を

井口 栞

山内桃児

袴田正隆

井口吾郎

池田伊吹

寺下忠至

夕羽 自由題

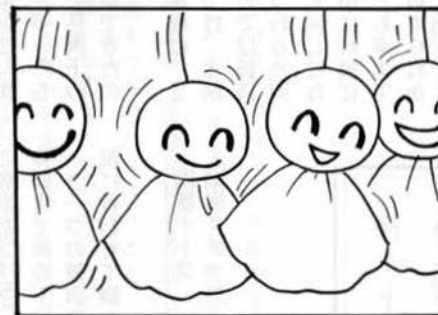
さっちゃんね



62 かい日

かまち♡ふろう

かまちよしろう先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。(静岡新聞・山梨日々新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日々新聞・新日本海新聞・山形新聞・長崎新聞・岐阜新聞・以上朝刊。中国新聞・神戸新聞、以上夕刊)



あればあれ手のびる先の決断願 岱潤

世の中の決めごとの中には、多数決で決めていいことと悪いことがあるように思われる。たとえば「お寺の門は閉めてはいけない」と、ある日多数決で決められては困るように、一部の人のその時の都合で、多数決で決めてはいけないことというのがあらずだ。

今回の臓器移植法案の改正という、脳の判定基準に関する衆議院の議決は、はたしてやってよかったことなのであるか。今後参議院でどのように採決されるかわからないので何とも言えないが、このようないのちの基準作りに、わずか

八時間の審議、勉強会にはわずかな人数しか出ていないというそんな議院たちが、一体どれだけさまざまな状況下の人々を理解したうえで採決ができたのだろうか。

元々臓器移植という新しい医療は、さまざまな形でいのちに格差をつけ、差別を作っている。すでにアメリカでは経済力と身体障害による移植にまつわる差別が顕著に表れている。日本でも同じになるかと思うとぞっとする。確かに移植によつて助かるいのちがあることも事実である。しかしそれによつて見捨てられかねないいのちや、世間から放棄を迫られるいのちが増えることも確かだ。いのち

に格差をつけること、そんなことを議会が多数決で決めていいことなのであるか。一つ一つの個別のいのちを、その時の状況に合わせて個々に考えるべきだ。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤光道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十五巻七・八月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十一年六月二十日
発行 平成二十一年七月一日

発行人 佐藤良純
編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一
東京都港区芝公園四・七 四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三・五七八・六九四七
FAX 〇三三・五七八・七〇三六
振替 〇〇一八〇・八・八二八七

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養蓮寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓爾(静岡・華陽院)
本多義教(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
脇 博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkan-jodo.info>

華果亦然

華も果も、また然り
無量寿經

亜細亜大学講師
東京高輪・光福寺住職

生野善應

我、もろもろの縁あつて、いまあるを知る。
華や実もしかり。

「藕糸の縁」とは、人の繋がりやハスの根に譬えたもの。一本のハスを取り出しますと、一方の根は細く千からびて土に歸し、もう一方は細いけれどもみずみずしく、これから伸びる部分。真ん中の太い部分は真直ぐに水面に茎を伸ばして、ハスの花が咲いています。土に歸した部分は他界した人、みずみずしい部分は子や孫を指し、太い部分

は現役で仕事して社会に貢献している人を指すのです。しかし彼らも先祖との関係なしにはありえず、子や孫は、生活に張りを造っています。一家族を一本のハスにたとえ、ハスがたくさん集まっている姿を人の社会にたとえて、そこから家族の支え合いが生まれ、人や社会の幸せがあることを示しているのです。

法然上人鑽仰会の

本

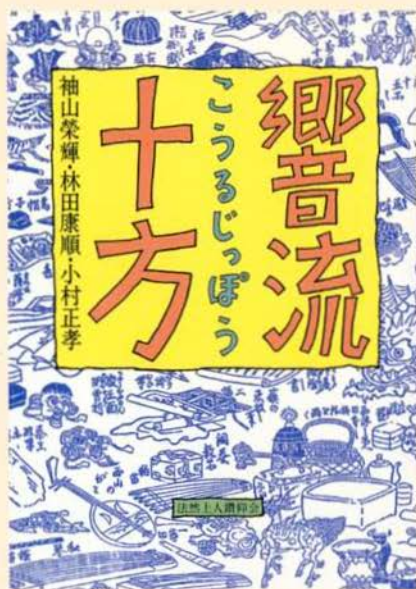
当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036



響流十方こうるじっぽう

600円(税別)

『差出人は法然さん』

600円

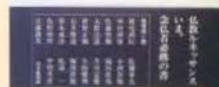


月刊『浄土』
バックナンバー



『念佛讀本』完全復刻版

1,600円



巾額装寸法 47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)

『選擇集絵解き物語』含む

20,000円(別途梱抱料300円)



『法然上人絵伝絵葉書』

(8枚セット)800円



幸浄土宗大本山増上寺蔵
『法然上人絵伝・残欠二巻本』より